

また、平成2年夏に、軽井沢で開かれた国際カイアシ類(橈脚類)学会に参加され、世界の第一人者ドイツのオルデンブルグ大学教授シュミンケ博士と、寝食をともにしながら親交を深められた。この国際学会は、先生の生涯にとって最も楽しく、最も充実した日々であったらしく、その後もしばらくは、想いだされては、シュミンケ博士の話がされた。

一昨年8月上旬、かねてからの肝臓疾患治療のため、県立循環器センターに入院された。先生の肝臓疾患は、昭和52年3月胃の全摘出手術の際の輸血が原因で、肝炎を患われた。肝炎は肝硬変へと進み、既に手の施しようもなく、平成5年9月24日遂に帰らぬ人となられた。今や幽明境を異にして、再び先生の温かなお姿に、真摯なご研究のお姿に接することが出来なくなりました。ご冥福を心からお祈りしつつ筆を置きます。安らかにお眠りください。

〈三浦佳文先生の略歴〉

大正2年3月24日 龍野市蒼田町福田に生誕
昭和4年3月 兵庫県立龍野中学校卒業
昭和9年3月 東京高等師範学校理科三部卒業
昭和9年3月 埼玉県立浦和中学校教諭
昭和16年3月 第一東京市立中学校教諭
昭和16年6月~21年7月 応召
昭和23年3月 兵庫県立龍野高等学校教諭
昭和25年秋~ 地下水動物の研究を始める
昭和38年4月 兵庫県立姫路西高等学校教頭
昭和43年4月 兵庫県立加古川西高等学校校長
昭和44年4月~48年3月 本会会長
昭和47年10月 学制百年記念文部省教育功労章受賞
昭和48年3月 定年退職
昭和63年5月 叙勲 勲四等瑞宝章
平成5年9月24日 肝硬変のため逝去

〈三浦佳文先生 論文著書目録〉

MIURA, Y., 1962. Three new harpacticoid from the subterranean waters of Shikoku in Japan. *Jpn. J. Zool., Tokyo*, 13 : 267-274.
MIURA, Y., 1962. Subterranean harpacticoid copepods of the Amami Group of the Ryukyu Islands. *Annot. Zool. Japon., Tokyo*, 35 : 95-105.
MIURA, Y., 1964. Subterranean harpacticoid copepods from a driven well in Japan. *Jpn. J. Zool., Tokyo*, 14 : 133-141.
MIURA, Y., 1969. A new harpacticoid copepod from a sandy beach of Lake Biwa. *Annot.*

Zool. Japon., Tokyo, 42 : 40-44.

三浦佳文：日本の Harpacticoida (ソコムジンコ類)。『中国/日本・淡水産橈脚類』500-563。たたら書房、鳥取。(1984)。

三浦佳文：ソコムジンコ目。水野寿彦・高橋永治(編)。『日本淡水動物プランクトン検索図説』51-97。東海大学出版会、東京。(1991)。

三浦佳文・森本義信：Bathynellidae の日本における発見。『科学』21 : 589-590。(1951)

MIURA, Y., & Y. MORIMOTO, 1953. Larval development of *Bathynella morimotoi* UENO. *Annot. Zool. Japon., Tokyo*, 26 : 238-245.

三浦佳文・森本義信・横田利彦：生きた化石 県下の地下水動物。『兵庫県生物誌』[兵庫県生物学会]，43-47。神戸新聞社、神戸。(1956)。

MORIMOTO, Y., & Y. MIURA, 1957. *Allobathynella japonica* gen. et sp. nov., a new Bathynellid from Japan. *Proc. Japan Acad., Tokyo*, 33 : 145-148. (もりもと よしのぶ：常任理事)

生物学会の屋台骨を強くした渋谷久雄先生

平畑 政幸

渋谷久雄先生は、戦時中に主計将校としてフィリピンで活躍され、復員。再出発をはじめられたのが、当時、紅谷進二先生が校長をされていた明石女子商業学校で、創立総会の後であった。

嘱望されて生物学会の会計を担当された。県立明石高校に移られて後、その実力を発揮されたのが、生物入試問題集を県内版として販売し、生物実験ノートの発刊の企画など、当時急速に頭角を現してきた数研出版との交渉であろう。

これが『高校生物ハンドブック』へと進展して、生物学会運営の大きな財源となり、会員の多方面の研修をすすめる原動力となった。渋谷先生の将来を見据えた慧眼のもたらしたものといって過言でない。

昭和24年『郷土の生物』(兵庫県生物学会編、神戸新聞社刊)は、兵庫県博物学会の活動とその研究成果として生まれたものであろう。

昭和35年発行の『兵庫の自然』(兵庫県生物学会編、のじく文庫発行)は、創立初期10年の成果を集成したものである。佐藤茂樹先生と渋谷先生の2人で編集を担当され、80人もの執筆者の原稿をガリ版刷りにして20回におよぶ編集会議で激論をたたかわせ、あるものは現地でも再調査、原稿の書きなおしがあったり、学究的な気風のなかで、産声をあげたことをうかがわせる。これが良い伝統になり、その後の『続兵庫の自然』『新兵庫の自

然』の2冊を世に問うことになるのである。

明石高校では主として化学を担当され、永く野球部の顧問として休日のない生活が続いた。学年主任に選ばれ、きびしい勤務になってしばらくして、体調が思わしくない状態が続いた。外地でマラリアにかかり、その薬害と思われる障害が激しくなって、休職されていた。平成7年6月が十三回忌であった。

昭和39年から平畑が会計のお手伝いを始め、ご指導をうけながら担当してきた。昭和42年ころ、県庁の会計担当者の強い指導が3年間続いた。渋谷方式に新しい方式を加えて、平畑、上岡先生、西田先生と会計部が引き継がれ、渋谷先生の確立された気風が今も続いているのである。

昭和30年代、40年代の総会のときには、室井、渋谷、当津の三先生の顔があり、会運営のスムーズな流れが毎年みられたのも懐かしい思い出になっている。

「左右性の謎」(『兵庫生物』2巻3号)の先生の論文は、現在にもそのまま展開できる議論であり、先生のお人柄がしのばれるものである。

(ひらはた まさゆき：会長)

猪股涼一先生の思い出

西本 裕

先生とは何度もハバチの採集に同行させていただきました。八ヶ岳の西側、入笠山に着いて荷物をほどもどかしく捕虫網と毒ビンを持って飛び出して行かれました。先生の採集スタイルは決まっています、歩くときはいつも道の左側から見て行かれました。その速度は本当にゆっくりで、植物の葉を食べているハバチの幼虫の食痕を見つけながら葉を一枚一枚裏返して、めざす幼虫を見つけるとリュックをおろして、携帯用のプラスチックシャーレの中に幼虫と食草を入れ、リュックの奥にしまわれるのでした。

先生の専門はハバチのうちでも難解な *Pachyprotasis* 属の生態と分類です。幼虫を採集して飼育・羽化させて、その生活史を一つ一つ解明してゆく非常に根気のいる仕事でした。30代の頃の先生は、夜は定時制課程の教師を、昼は兵庫県立農科大学(現神戸大学農学部)でハバチの研究を、長期の休みとなればリュックをかたいで採集の毎日、ご家族のご苦勞が忍ばれる大変な時期でした。

研究を続けること20年余り、「A Revision of the Genus *Pachyprotasis* Hartig of Japan (Hymenoptera, Tenthredinidae)」(大阪府立大学農学博士)という学位論文を提出されました。その内容は次のようでした。当時、日本に産する *Pachyprotasis* 属ハバチは、多くとも20種と考えられていたが、生態特に幼虫

の食性並びに成虫の産卵習性の調査によって、69種に分類できること、及びこれらが形態的に16の種群に分けられることでした。なお69種中52種は新種でした。因みに全世界におけるこの属のハバチは、これらの52種を含めて112種知られたこととなります。1987年には世界で初めてミツガシワハバチという幼虫が水の上を歩くことを見つけ新聞紙上で大きなニュースになりました。先生はハバチの研究だけでなく、サツキの盆栽、日本酒、俳句と大変趣味が広く人生を楽しんでおられました。今年(1995年)1月17日、兵庫県南部地震で自宅が全壊の被害を受けられ、その後の心労で、3月、肺炎のため70歳で急逝されました。ここに慎んで先生のご冥福をお祈りします。(にしもと ゆたか)

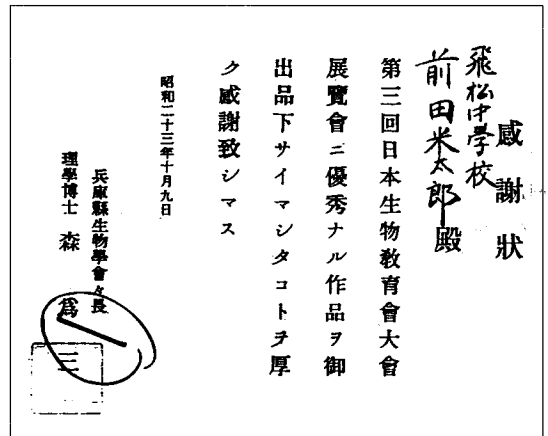
白川の化石

前田米太郎

白川峠

昭和14、5年頃から戦後にかけて、白川の化石集めに熱中したことがある。その頃は板宿からの市バスは、車道が終点で、ここから坂道をのぼって白川峠へ行く。峠の手前左側に小さな池があり、池のそばに凝灰岩を粉砕して磨き砂をつくっている小さな工場があった。池を過ぎると右に回って峠になるが、峠を登りつめた所に一軒、峠の茶店といえそうな家があった。峠の付近は、この二つの家屋以外は雑木の林ばかりの淋しいところであった。

磨き砂をつくっている家の付近は、凝灰岩層の小山で、つるはしを割れ目に打ちこんで岩を崩していた。ガサッと大きく崩れると、時には1m四方もあるシュロの葉の化石がでてくる。「すみません。化石を採らせて下さい」と挨拶して仕事場に入っていくと、化石なんか採りに来る人もいない頃だから、迷惑がらずに採らせてくれた。



化石標本を生物教育会に出品して戴いたもの